

# 書 評 と 紹 介

田中ひかる著

## 『ドイツ・アナキズムの成立』

《フライハイト》派とその思想』

評者：三宅 立

本書は、『フライハイト』紙に焦点を定めながらドイツ・アナキズムの成立を論じた、ドイツ・アナキズムに関する日本で最初の本格的な研究書である。

『フライハイト』紙は、社会主義者鎮圧法を逃れてロンドンに亡命したヨハン・モスト(1846～1906)によって、1879年、ロンドンで創刊され、一時スイスに発行地を移したが、1882年の末からはニューヨークで発行された。従って、ここで「ドイツ・アナキズム」というのは、「ドイツにおける」アナキズムではなく、「ドイツ語を話す人々を担い手とした」アナキズムをさす。そこにすでに、当時ドイツやオーストリアといったドイツ語圏出身のアナキストたちのおかれていた厳しい状況が示唆されているといえよう。しかしそこには、また、当時のロンドンやニューヨークに、アナキズム紙を支える「ドイツ人」移民たちの世界が存在したこともまた示唆されているのである。

本書の構成は次の通りである。

序 章

第一章 先駆者たち

第二章 社会民主主義からアナキズムへ

第三章 ロンドンからニューヨークへ

第四章 合衆国におけるアナキズム派の形成

第五章 自由社会論をめぐる

第六章 行動するドイツ・アナキストたち

終 章

序章では、まず「アナキズム」「アナキスト」について、次のような指摘がなされている。これらの言葉に関しては、近年に至るまで、多くの場合、「暴力を行使して社会秩序に反抗する人々」というイメージが描かれてきた。これに対して著者は、アナキストたちが提起した、「自由」と「連帯」、あるいは「無支配」という意味でのアナキーはいかに実現されるのかという問題が、今もなお重要であり、今後もそうあり続けると考える。そして本書の課題は、まさにそうした問題提起が成立した過程を明らかにすることである、と。その際、著者は、ドイツの社会主義運動や労働運動において常に圧倒的多数派だった社会民主主義派から、自身を切り離れた少数の人々として「ドイツ・アナキズム」が形成されたことを重視し、そこに『フライハイト』派とその思想を研究する独自の意義を認めている。

次いで、第一章では、『フライハイト』派に先行したドイツ・アナキズムの先駆者たちとして、スイスのジュラ連合に参加したドイツ出身の植字工ラインスドルフとヴェルナー、錠前工のリンケらが注目され、同連合における「アナキスト共産主義」(アナキズム史家ネットラウのいわゆる「共産主義的アナキズム」)思想の形成がバクーニンからクロボトキンへの流れの中であとづけられる。当初掲げられてい

た「集産主義」から「アナキスト共産主義」の採択（1880年10月）への転換が、「集産主義」「共産主義」という語それぞれのはらむイメージの変化とも関連していたという指摘は興味深い。ちなみに、「共産主義」という言葉は、元々バクーニンやクロボトキンにとって権威主義的な社会主義ないしは修道院や兵營のような制度をイメージさせるものであったが（当初「集産主義」という言葉が支持されたのはそのためであった）、共産主義的アナキズムでは、「各人はその能力に応じて働き、その欲求に応じて消費する」原理を示すものとなったという。

第二章では、『フライハイ』紙が、「ドイツ社会主義労働者党」（ドイツ社会民主党の前身）の元帝国議会議員モスト（アウクスブルク生れの製本職人）によって、同党本来の「ラディカルな立場」「共和主義的、社会主義的原理」を海外にあって堅持するべく創刊されたことがまず確認される。同紙は、その後、革命近しという認識から、社会主義者鎮圧法による弾圧を避けようとして穏健な戦術をとる同党指導部への批判をくりひろげ、少数の革命家の先導する暴力的なプロセスという「革命」観を明確にしていく。その中で、同紙は自己を「社会革命家」と規定し、1880年9月には、前記ラインスドルフのアナキズムに関する論説を掲載したが、それはなお必ずしも同紙がアナキズムの立場に立ったことを意味するものではなかった。同紙が「アナキスト」としての立場を明確にするのは、1882年10月のことだったが、著者によれば、この「社会革命家からアナキストへ」の過程は、ドイツ社会主義労働者党の「権威主義」的な体制と、ビスマルクの労災保険法をはじめとする「国家社会主義」に対する少なからざる同党議員たちの好意的な態度とへの批判が、「人民国家」の「[中央]集権主義」的な組織への批判、自立的組織からなる「自由社会」

「アナキー」の希求へと発展したものにほかならなかった。こうして『フライハイ』紙上で主張されることとなるアナキズムは、著者によれば、ジュラ連合から直接影響を受けることなく独自に編み出されたものだったのであり、理想社会の側から現実を見るラインスドルフのアナキズムとは区別されるものだったのである。なお、現代は「革命の時代」だとした同紙の認識の根拠として、社会主義者鎮圧法と並んで、「世界恐慌」（いわゆる「大不況」）や、軍備増大のための保護関税の導入等による労働者の状況の悪化（「飢餓チフス」の発生など）が挙げられていたことは、「社会民主主義からアナキズムへ」という上記の過程の時代背景を示唆するものとして重要であろう。

第三章では、まず、1881年3月、ロシア皇帝アレクサンドル二世の暗殺を『フライハイ』紙が歓迎したことからモストが投獄されたあと、同紙がロンドンでどのように運営されていたかが検討される。当時同紙を担っていたのは、北ドイツ出身の指物工で「モストの右腕」と呼ばれたネーフェ、バイエルン出身の同じく指し物工トゥルンク、大学で学んだ知識人のシュナイト、マインツ生まれのユダヤ系ドイツ人で「革命兵学」を唱えたガンツ、植字工のメルテンといった面々であった。次いで、『フライハイ』紙が、1882年初夏、ダブリンに赴任したアイルランド新総督のアイルランド革命派フィーニアンによる暗殺を支持する論説を掲げて弾圧され休刊を余儀なくされると、シュテルマハーらチューリヒの『フライハイ』派がその再刊の中心となった。同紙のアナキズムへの路線転換の完了は、このスイス時代のことだったことになる。1882年10月、モストが釈放されると、彼はロンドンからニューヨークに移り、『フライハイ』紙のアメリカ合衆国移転を実現させたが、これに積極的に協力したのは、同

地の「社会革命クラブ」の中心人物シュヴァーブであった。そもそも、同紙の創刊も、ロンドンの「共産主義労働者教育協会」というドイツ系移民労働者を主体とした組織と、亡命してきたモストとの出会いによるものであった。総じて本書では、『フライハイト』紙について、モスト以外にも執筆者が多数存在し、またロンドンの協会やニューヨークの組織が編集や運営業務、さらには資金面で同紙を全面的に支援していたことが重視されている。モスト個人ではなく『フライハイト』紙の思想が考察の対象とされている所以である。第三章では、さらに、ドイツ国内への発送、「密使」たちによる持ち込みや組織結成の働きかけ・情報の伝達、ドイツ各地の購読者・購読者組織の存在があとづけられ、ドイツ国内に『フライハイト』派が微々たるものではあれ存在したことを印象付けている。なお、『フライハイト』紙へのイギリス当局による弾圧の大きな節目となったのが、ロシアやアイルランドの革命派の動きだったことは、『フライハイト』派の動向を考える上で当時の国際的な動きが重要な意味をもっていたことを端的に示すものといえよう。

第四章では、合衆国におけるアナーキズムの形成が、モストの到着以前における社会革命派の形成から、1883年10月の全国社会主義者会議（「ピッツバーグ会議」）にかけて、たどられている。合衆国の社会民主主義派「社会主義労働者党」から別れて社会革命派が形成されたのは、労働者の自衛を目的とした武装組織や選挙における他政党との共闘をめぐる執行部批判を契機としてであった。ニューヨークの社会革命クラブは、1880年11月、シュヴァーブやハッセルマン（彼はドイツ社会主義労働者党所属の帝国議会議員で、「議会での無駄話の時代が終わり、行動の時代が始まった」という考えは人民の意識に深く浸透している」という同年5月の議会で

の発言を契機に同党を除名された）らによって党から独立した組織として結成されたが、その綱領では、暴力革命による搾取者と圧政者の殲滅が主張され、反集権主義的な組織論に基づく未来社会の建設がうたわれていた。翌81年の7月、ロンドンで社会革命派が大団団結した国際革命家会議が開かれ、暴力革命が早期に到来するという予測とそれに向けた準備が訴えられると、同年10月、ニューヨークの社会革命クラブなどが主導して、ニューヨークと並ぶ社会革命派の拠点シカゴ（ここでもドイツ系移民は大きな比重を占めていた）で合衆国社会主義者会議が開かれ、労働者の武装組織への支持が表明された。この動きはその後沈滞していたが、82年末モストがニューヨークに到着し、翌83年の初夏にかけて合衆国東部および中西部を2回にわたり遊説すると、社会革命派の統一組織結成の動きが高まった。こうして開かれた同年10月の「ピッツバーグ会議」は、社会革命派の全国組織「国際労働者協会」を結成し、その綱領「ピッツバーグ宣言」を採択した。この宣言は、モストの原案を基に、彼自身を含む宣言文起草委員会や本会議での議論を踏まえて成ったものであるが、著者は、原案との比較検討の結果、以下の指摘を行っている。宣言では、原案になかった合衆国独立宣言への言及があるが、これは労働者の武装、あるいは暴力革命論を正当化するためにとどまらず、原案をアメリカの文脈におきかえる重要な機能を果すものであったと。原案にあった「財産共有制」というアメリカでは「怠け者」の社会を意味していた「共産主義」とほぼ同義の語が削除され、それに代わって「協同組合的な生産組織」に基づく自由な社会の創設が前面に押し出されたこと、また、原案になかった「人種」に左右されない平等の要求が加えられたことにも、著者はこうした運動のアメリカ化の機能を読み取っている。

第五章では、『フライハイ』紙上で未来社会を示す語として浮かび上がった「自由社会」について、パンフレット『自由社会』（1884）に収められた同紙所載の諸論説を中心に検討される。著者によれば、モストラ『フライハイ』派の、多様な「コムニオン」の連合という「連合主義的」な自由社会論は、一方において、「人民国家」、ないしベーベル流の「中央管理機構」によって統括される「国家なき未来社会」を唱える社会民主主義と、他方では、個人の自由と基本的諸権利を重視し、野蛮な暴力の手段を退けるタッカーらの個人主義的アナキズムと対決する中で明確にされていったものであった。そしてそれは、労働を義務とし（「働かざる者、食うべからず」）、「労働に応じて」報酬を得ることを支持する点で、ジュラ連合に連なるリンケ、ポイケルト（オーストリア出身の塗装工）らの共産主義的アナキズムとも対立するものであった。しかし、『フライハイ』派が最も重視したのは来るべき革命の勃発であり、大多数の人々が理解でき、しかもすぐにも実現可能な未来社会像を描くことを重視したのもそのためであった、と著者は推定している。

「行動するドイツ・アナキストたち」を論じた第六章は、まず、革命勃発への期待ないし不安が、ベーベルのような社会民主主義者やビスマルクのような保守的な政治家にも共有されていたことを確認する。『フライハイ』紙上では、1881年7月の上記「国際革命家会議」で採択された「行動によるプロパガンダ」を受けて、「蜂起行動」が推奨される一方、個人による暗殺もまた「行動」として称賛され、ダイナマイトの威力への期待感が表明された。著者によれば、『フライハイ』紙は、ロシア皇帝の暗殺やフィーニアンによる爆破事件をはじめとする多様な革命派の行動を擁護していく過程でその主張をエスカレートさせていったのであ

る。とりわけ、1882年から85年にかけてドイツ語圏でアナキストたちによる殺人や強盗が、ニーダーヴァルトの国民的記念碑「ゲルマニア」像の除幕式におけるドイツ皇帝暗殺未遂事件（計画の中心はラインスドルフ）を含め、引き続き起こると、同紙はこれらを「私有財産への攻撃」、「行動によるプロパガンダ」として擁護し、意志の強固さを示した犯人たちを「行動の人」「殉教者」「英雄」として賞賛した。そしてそうした行動がまた、逆に、同紙の革命観や革命戦術に影響を与えることとなった。しかし、オーストリアでは、一連の事件は厳しい弾圧の端緒となり、スイスでも、多くのアナキストが追放されて運動は大打撃を受けた。そして合衆国でも、1886年シカゴのヘイマーケット事件による同地のアナキスト指導者たちの処刑は、合衆国社会革命派の全国組織「国際労働者協会」の運動全体にとって致命的な打撃となった。『フライハイ』紙は、その後も依然として「行動によるプロパガンダ」を主張し続けたとはいえ、モストもまた、1890年には、暗殺はアナキストに対する敵意を引き起こすだけだということを確認することとなるのである。

終章では、まず、『フライハイ』派がアナキズム路線を採択するに至った経緯がふりかえられ、ラインスドルフら他者の思想的な影響よりも、社会民主主義内部の組織と理念をめぐる論争が重要だったこと、また、同派の主張が常に具体的な事実に基づいて展開されていたことが同時代の人々に訴えかける力を持ち得た根拠となったことが、あらためて指摘される。その際、パクーニン、クロポトキンやブルードンといった、今日ではアナキズムを代表する思想家として挙げられる人々の思想が、当時ドイツ語圏ではほとんど知られていなかったか、ブルードンの場合は暴力革命論者ではなかったことから学ぶべき対象とはされなかったために、

モストラの思想は「自家製」(ネットラウ)たらざるをえなかった、と著者はとらえている。そして、著者は、こうした「自家製」の思想が、たとえば「働かざる者、食うべからず」という主張のように、モストラの日常的な実感に基づくものであり、かつ、他の社会主義思想とも共有するところが多かったことにも注意を促している。

終章の最後では、残された課題として、こうした類似性をもつ社会民主主義との全面的な比較、あるいは他のヨーロッパ地域のアナーキズムとの比較、さらに、『フライハイト』派が多かれ少なかれ影響を与えたと考えられる1890年以降のドイツにおける、ランダウアーやロッカーらによるアナーキズムやサンディカリズムの展開との関連の検討が挙げられている。とりわけ、同じく今後の課題とされた、一連の強盗・殺人事件の警察資料に基づく解明とそれらがその後の運動や思想に及ぼした影響の検討は、本書冒頭にも示されたアナキストにまつわる「負のイメージ」を創り出すことにこれらの事件が大きく貢献しただけに、重要な課題といえよう。その際、著者も言うように、そうした事件をくりひろげた人々が、厳しい迫害の中にあって、あるいは革命勃発が間近であるという雰囲気の中において、革命戦術をめぐる主張と行動をエスカレートさせていったこと、従って、彼らの主張と行動がそれなりの歴史的文脈の中で展開されていたことは、十分に留意さるべきことであろう。そうした「歴史的文脈」に対する我々の眼を大きく開いてくれたことは、同時代の社会民主主義との類似性の指摘とともに、本書の重要な功績であるように思われる。

この「歴史的文脈」の問題とも関連して一言すれば、『フライハイト』紙を中心としてドイツ・アナーキズムの成立を論じた本書では、ジュラ連合に連なるドイツ・アナキストたち

は、先駆者として位置づけられるにとどまり、その機関紙であった、ベルンの『労働者新聞』(1876~77)や、リンケ、ポイケルトらによるロンドンの『レベル』紙(1883~86、81年の創刊号はスイス)とその後継紙『アウトノミー』(1886~93)は、彼らと深い関係にあったジュネーヴのフランス語紙『レヴォルテ』(1879年創刊)ともども、正面から考察の対象とされているとは言い難い。しかし、その一人ラインスドルフが本書で明らかにされているようにモストや『フライハイト』派とさまざまな時点で重要な関わりをもっていた事実一つをとってみても、その本格的な検討が望まれる。そして本書では、彼らが1870年代にドイツ各地で、その規模は小さかったといえ支持者を獲得したことが指摘されているが、そうした人々がどういう人々から構成され、また1880年代の『フライハイト』派の国内における支持者たちやその後のアナーキズム、サンディカリズムの運動とどういう歴史的ないし社会的な関連にあったかも、解明が待たれるところであろう。

本書は、総じて、ドイツ・アナーキズムの成立過程を、『フライハイト』紙をはじめとする数多くの同時代文献を内外にわたって広く渉猟し、かつそれを徹底的に読み込むことによって明らかにしたものであった。著者の労多い地道な努力が大きな実を結んだことに深い敬意を表するとともに、そうした文献を収集・所蔵し広く閲覧に供している、法政大学大原社会問題研究所、一橋大学図書館・同社会科学古典資料センターや、アムステルダムの国際社会史研究所を初めとする内外の研究所・図書館・文庫の存在の偉大さをあらためて痛感するものである。

(田中ひかる著『ドイツ・アナーキズムの成立 - 《フライハイト》派とその思想』御茶の水書房、2002年2月刊、vi+240+31頁、定価5,200円+税)

(みやけ・たつる 明治大学文学部教授)